

(19)日本国特許庁 (JP)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-351976

(P2002-351976A)

(43)公開日 平成14年12月6日 (2002.12.6)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>  
G 0 6 F 17/60  
A 6 1 G 12/00

識別記号  
1 2 6  
5 0 6

F I  
G 0 6 F 17/60  
A 6 1 G 12/00

テマコード(参考)  
1 2 6 A 4 C 3 4 1  
5 0 6  
Z

審査請求 未請求 請求項の数6 O.L (全 11 頁)

(21)出願番号 特願2001-156253(P2001-156253)  
(22)出願日 平成13年5月25日 (2001.5.25)

(71)出願人 501209232  
木山 東児  
広島県東広島市西条中央6丁目32番地3  
(71)出願人 501209243  
加治 順子  
香川県高松市木太町4区2094  
(71)出願人 501209254  
長谷川 昌雄  
神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1丁目57番地43  
(72)発明者 木山 東児  
広島県東広島市西条中央6丁目32番地3  
(74)代理人 100089222  
弁理士 山内 康伸

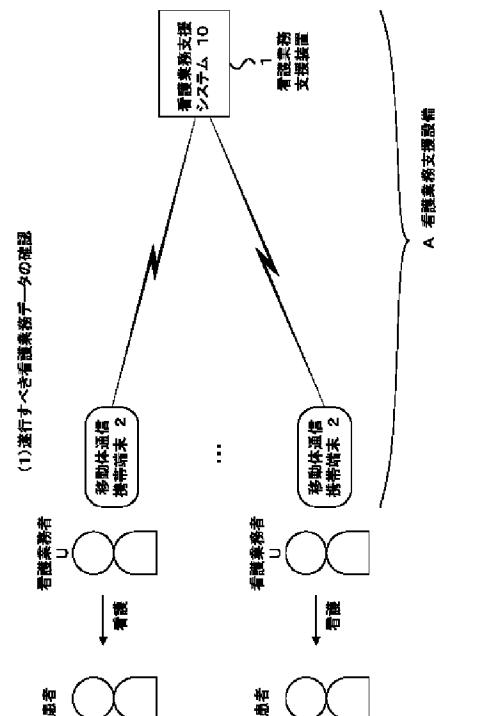
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 移動体通信携帯端末、看護業務支援システム、これを記録したコンピュータ読み取り可能な記録媒体、看護業務支援装置および看護業務支援設備

(57)【要約】

【課題】看護業務者全員が同一情報を共有することができ、患者誤認等による医療過誤を防止でき、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる看護業務支援技術、看護業務支援システムを提供する。

【解決手段】看護業務者U毎にスケジューリングされた看護業務データが格納され管理される看護業務データベースDB1～DB6と、看護業務データベースDB1～DB6を検索するための検索手段1 1と、検索手段1 2によって検索された検索結果を、移動体通信携帯端末2に送信するための送信手段1 3と、看護業務実施完了データを無線で受信する受信手段1 3と、受信した看護業務データを看護業務データベースDB1～DB6に格納するためのデータ格納手段1 4とを備えている。



誰がどの患者に対してどのような看護を行うべきかを示すことができる。看護業務が完了すると、完了報告を筆記用具により看護経過記録として保管している。

#### 【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかるに、看護業務スケジュール表に実施完了報告を記録するだけでは正確性に欠けるとともに、看護業務従事者の個人差によって、記録として書かれる完了報告に優劣が発生する。このため、完了報告の記載モレや不明確な記載、不明瞭な記載等により、看護業務のうまく引き継ぎができず看護業務の実施忘れや遅延の発生を招いているという問題がある。また、看護業務スケジュール表だけでは、看護すべき患者個人を識別する決定的な情報がないため、患者誤認等による医療過誤の発生の原因ともなっているという問題がある。

【0004】本発明はかかる事情に鑑み、看護業務者全員が同一情報を共有することができ、患者誤認等による医療過誤を防止でき、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる看護業務支援技術を提供することを目的とする。

#### 【0005】

【課題を解決するための手段】請求項1の移動体通信携帯端末は、看護業務データを無線で受信するための受信部と、前記看護業務データを表示するための表示部と、看護業務実施完了データを入力するための入力部と、前記看護業務実施完了データを無線で送信するための送信部とからなり、前記表示部に表示エリアが設けられ、該表示エリアに同心で複数の時間円が表示されており、前記スケジューリングされた看護業務データが各時間円上で点として点灯するようにしたことを特徴とする看護業務支援システム。

【請求項4】請求項3記載の看護業務支援システムが格納されたことを特徴とするコンピュータ読み取り可能な記録媒体。

【請求項5】コンピュータであって、請求項4記載のコンピュータ読み取り可能な記録媒体を備えたことを特徴とする看護業務支援装置。

【請求項6】請求項5記載の看護業務支援装置と、請求項1記載の移動体通信携帯端末とからなることを特徴とする看護業務支援設備。

#### 【発明の詳細な説明】

##### 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、看護業務支援技術に関する。

##### 【0002】

【従来の技術】従来より看護業務においては、看護婦等の看護業務従事者は、事前に作成した看護業務スケジュール表に従い看護業務を行っている。看護業務スケジュール表には、看護されるべき患者、看護する看護業務者、看護業務内容および時間帯等の看護業務情報が書かれている。この看護業務スケジュール表により、いつ、

誰がどの患者に対してどのような看護を行うべきかを示すことができる。看護業務が完了すると、完了報告を筆記用具により看護経過記録として保管している。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかるに、看護業務スケジュール表に実施完了報告を記録するだけでは正確性に欠けるとともに、看護業務従事者の個人差によって、記録として書かれる完了報告に優劣が発生する。このため、完了報告の記載モレや不明確な記載、不明瞭な記載等により、看護業務のうまく引き継ぎができず看護業務の実施忘れや遅延の発生を招いているという問題がある。また、看護業務スケジュール表だけでは、看護すべき患者個人を識別する決定的な情報がないため、患者誤認等による医療過誤の発生の原因ともなっているという問題がある。

【0004】本発明はかかる事情に鑑み、看護業務者全員が同一情報を共有することができ、患者誤認等による医療過誤を防止でき、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる看護業務支援技術を提供することを目的とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】請求項1の移動体通信携帯端末は、看護業務データを無線で受信するための受信部と、前記看護業務データを表示するための表示部と、看護業務実施完了データを入力するための入力部と、前記看護業務実施完了データを無線で送信するための送信部とからなり、前記表示部に表示エリアが設けられ、該表示エリアに同心で複数の時間円が表示されており、前記スケジューリングされた看護業務データが各時間円上で点として点灯するようにしたことを特徴とする。請求項2の看護業務支援システムは、看護業務者毎にスケジューリングされた看護業務データが格納され管理される看護業務データベースと、該看護業務データベースを検索するための検索手段と、該検索手段によって検索された検索結果を、前記移動体通信携帯端末に送信するための送信手段と、看護業務実施完了データを無線で受信する受信手段と、受信した看護業務データを前記看護業務データベースに格納するためのデータ格納手段とを備えたことを特徴とする。請求項3の看護業務支援システムは、請求項2記載の発明において、前記看護業務データベースが、患者番号毎に、患者基本情報を格納して管理する患者基本データベースと、患者番号毎、診察科毎に、診察科情報を格納して管理する診察科データベースと、診察科毎、担当医毎、病名毎に、診療情報を格納して管理する診療データベースと、担当医毎に、担当患者情報を格納して管理する担当患者データベースと、患者番号毎に、医師指示情報を格納して管理する医師指示データベースと、患者番号毎に、看護計画情報、看護実績情報および看護管理情報を格納して管理する看護データベースとをからなることを特徴とする。請求項4のコン

ピュータ読み取り可能な記録媒体は、請求項3記載の看護業務支援システムが格納されたことを特徴とする。請求項5の看護業務支援装置は、コンピュータであって、請求項4記載のコンピュータ読み取り可能な記録媒体を備えたことを特徴とする。請求項6の看護業務支援設備は、請求項5記載の看護業務支援装置と、請求項1記載の移動体通信携帯端末とからなる。

【0006】請求項1の発明によれば、スケジューリングされた看護業務データが同心で複数の時間円上に点として点灯するので、看護業務者は自分が行うべき看護業務をいつ行うのかを一目で確認することができる。請求項2の発明によれば、看護業務者が行うべきスケジューリングされた看護業務データが、看護業務者毎に、看護業務データベースに一元的に管理されている。このため、各看護業務者が自分の遂行すべき看護業務データを問い合わせると、看護業務支援システムでは検索手段によって看護支援データベースから看護業務データが検索される。このため、看護業務者は、当日行うべき看護業務データを知ることができ、医療ミスを防止することができる。また、各看護業務者が看護業務完了毎に看護業務完了データを送信すると、看護業務支援システムではデータ格納手段によって看護業務完了データが看護業務データベースに格納される。よって、看護業務データベースを利用することによって、全ての看護業務者が同一情報を共有することができ、この結果、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる。請求項3の発明によれば、看護業務情報が、患者基本情報、診察科情報、診療情報、担当患者情報、医師指示情報および看護情報としてそれぞれ別々のデータベースで管理されている。このため、これらの看護業務情報を管理しやすく便利である。請求項4の発明によれば、看護業務支援システムをコンピュータで読み取ることができる。請求項5の発明によれば、看護業務支援システムを動作させることができる。請求項6の発明によれば、看護業務者が行うべきスケジューリングされた看護業務データが、看護業務者毎に、看護業務データベースに一元的に管理されている。このため、各看護業務者が移動体通信携帯端末から当該看護業務者が遂行すべき看護業務データを問い合わせると、看護業務支援システムでは検索手段によって看護支援データベースから看護業務データが検索され、この看護業務データは送信手段によって前記移動体通信携帯端末に送信される。このため、看護業務者は、当日行うべき看護業務データを知ることができ、医療ミスを防止することができる。また、各看護業務者が看護業務実施完了毎に看護業務完了データを移動体通信携帯端末から送信すると、看護業務支援システムではデータ格納手段によって看護業務完了データが看護業務データベースに格納される。よって、看護業務データベースを利用することによって、全ての看護業務者が同一

情報を共有することができ、この結果、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる。

#### 【0007】

【発明の実施の形態】つぎに、本発明の実施形態を図面に基づき説明する。図1は本実施形態の看護業務支援設備Aのネットワーク図である。同図に示すように、本実施形態の看護業務支援設備Aは、看護業務支援装置1と複数の移動体通信携帯端末2から構成されたものである。

【0008】まず、看護業務支援装置1を説明する。看護業務支援装置1はコンピュータであって、そのハードディスクやDVDディスク、CD-ROM等のコンピュータ読み取り可能な記録媒体に、看護業務支援システム10が記録され動作可能にインストールされたものである。看護業務支援システム10およびこれが記録されたコンピュータ読み取り可能な記録媒体はいずれも、看護業務支援装置1と同様に本発明の一実施形態である。なお、看護業務支援システム10を動作させるOSは、LINUXやUNIX（登録商標）、windows（登録商標）Me／NT／2000／98等、特に限定されない。また、看護業務支援システム10を記述するプログラミング言語は、HTML、XML、Perl、C、HDML、MML、JAVA（登録商標）等、特に限定されない。

【0009】つぎに、看護業務支援システム10を詳細に説明する。図2は看護業務支援システム10のシステム構成図である。同図に示すように、看護業務支援システム10には、看護業務情報を格納して管理する看護業務データベースを有している。この看護業務データベースとして、患者基本DB1、連絡引継DB11、最適クリティカルパスDB12、バイタルサインDB13、診療科DB2、診療DB3、標準クリティカルパスDB31、担当患者DB4、医師指示DB5および看護DB6を備えている。

【0010】患者基本DB1は、患者番号毎に、患者基本情報を格納して管理するデータベースである。患者基本情報としては、患者番号、氏名、ふり仮名、性別、生年月日、年齢、住所、保険種別、障害情報等を格納しておけばよい。また、患者基本DB1の患者番号毎に、各患者の顔写真を格納するための格納領域が設けられている。看護業務者Uが看護すべき患者を間違えないようするためである。

【0011】連絡引継DB11は、患者番号毎に、連絡引継情報を格納して管理するデータベースである。連絡引継情報としては、連絡引継事項等を格納しておけばよい。連絡引継DB11の患者番号と患者基本DB1の患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、連絡引継DB11の患者番号から患者基本DB1の患者基本情報を問い合わせることができる。

【0012】最適クリティカルパスDB12は、患者番号毎に、最適クリティカルパス情報を格納して管理するデー

タベースである。最適クリティカルパス情報とは、理想的な入院から退院までの予測されたスケジュール管理情報である。この最適クリティカルパスDB12の患者番号と患者基本DB1の患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、最適クリティカルパスDB12の患者番号から患者基本DB1の患者基本情報を問い合わせることができる。

【0013】バイタルサインDB13は、患者番号毎に、バイタルサイン情報を格納して管理するデータベースである。バイタルサイン情報とは、一般的には測定日、体温、血圧、脈拍、呼吸の測定値情報である。バイタルサイン情報としては、測定日、体温、血圧、脈拍、呼吸を格納しておけばよい。このバイタルサインDB13の患者番号と患者基本DB1の患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、バイタルサインDB13の患者番号から患者基本DB1の患者基本情報を問い合わせることができる。

【0014】診療科DB2は、患者番号毎、診療科毎に、診療科名等の診療科情報を格納して管理するデータベースである。この診療科DB2の患者番号と患者基本DB1の患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、診療科DB2の患者番号から患者基本DB1の患者基本情報を問い合わせることができる。

【0015】担当患者DB4は、担当医名毎に、担当患者番号等の担当患者情報を格納して管理するデータベースである。この担当患者DB4の担当患者番号と前記患者基本DB1の患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、担当患者DB4の担当患者番号から患者基本DB1の患者基本情報を問い合わせることができる。

【0016】また、標準クリティカルパスDB31は、病名毎に、標準クリティカルパス情報を格納して管理するデータベースである。標準クリティカルパス情報とは、一般的な入院から退院までの予測するスケジュール情報である。

【0017】診療DB3は、診療科毎、担当医名毎に、病名・診断や問診情報等の診療情報を格納して管理するデータベースである。この診療DB3の診療科と診療科DB2の診療科との間には、リレーションが張られている。このため、診療DB3の診療科から診療科DB2の診療科情報を問い合わせることができる。また、診療DB3の担当医名と担当患者DB4の担当医名との間には、リレーションが張られている。このため、診療DB3の診療科から担当患者DB4の担当患者情報を問い合わせることができる。そして、診療DB3の病名と標準クリティカルパスDB31の病名との間には、リレーションが張られている。このため、診療DB3の診療科から診療科DB2の診療科情報を問い合わせることができる。

【0018】医師指示DB5は、患者番号毎に、医師指示情報を格納して管理するデータベースである。医師指示情報としては、注射指示、処方指示、検査指示、処置指

示、手術指示、リハビリ指示、入退院指示、画像指示等を格納しておけばよい。この医師指示DB5の患者番号と担当患者DB4の担当患者番号との間には、リレーションが張られている。このため、医師指示DB5の患者番号から担当患者DB4の担当患者情報を問い合わせができる。

【0019】看護DB6は、患者番号毎に、患者のあらゆる得た看護情報を格納して管理するデータベースである。看護情報としては、看護計画、看護実績、看護管理等を格納しておけばよい。この看護DB6の患者番号と医師指示DB5の患者番号との間にはリレーションが張られている。このため、看護DB6の患者番号から医師指示DB5の医師指示情報を問い合わせができる。

【0020】つぎに、看護業務支援システム10におけるプログラムを説明する。看護業務支援システム10には、プログラムとして、検索手段11、送信手段12、受信手段13およびデータ格納手段14を備えている。検索手段11は、移動体通信携帯端末2から送信される検索要求に応じてデータベースを検索するためのプログラムである。送信手段12は、前記検索手段11によって検索された検索結果を、移動体通信携帯端末2に送信するためのプログラムである。受信手段13は、移動体通信携帯端末2から送信される看護業務データを受信するためのプログラムである。データ格納手段14は、移動体通信携帯端末2から送信されるデータ格納要求に応じて該当するデータベースの該当するレコードにデータを格納するためのプログラムである。

【0021】つぎに、移動体通信携帯端末2を説明する。図3は移動体通信携帯端末2の説明図である。同図に示すように、移動体通信携帯端末2は、移動体通信が可能な携帯端末であり、通信カードを備えているので、リアルタイムで通信ができ、どこでも利用が可能である。この移動体通信携帯端末2は、表示部21および入力部22を備えている。なお、この移動体通信携帯端末2は、200グラムくらいで重量は軽く、大きさは葉書くらいで、モバイル・ナースコール機能やPHS機能・デジタル機能を有し、発生源入力情報を一元的に表示でき、バイタルサイン入力情報を備えているものが好ましい。

【0022】つぎに、表示部21を説明する。図4は表示部21の拡大図である。同図に示すように、この表示部21は、液晶ないしはプラズマディスプレイ等の文字・図形の可変表示が可能な部品により構成されており、この表示部21は、使用者の要求に応じた機能に対応して、その表示内容が変わるものである。この表示部21は、サーバ用看護業務支援システム10から送信されたデータに応じて、対応する場所が点灯するようになっている。表示部21には、同心の4重円が表示されている。各円の上部、右部、下部、左部は、3時、9時、15時および21時をそれぞれ示している。

【0023】つぎに、表示エリア31を説明する。図5は表示エリア31の説明図である。同図に示すように、表示エリア31において、最外側の円は、看護サークル41の時間軸円であり、この円上には看護実施記録情報、バイタルサイン測定およびパスの時間情報等が液晶の点灯部分51として色や形状等を変えて表示される。最外から2番目の円は、コメディカルサークル42の時間軸円であり、この円上には検査結果情報、画像情報および薬剤情報等が液晶の点灯部分51として色や形状等を変えて表示される。最外から3番目の円は、ドクターサークル43の時間軸円であり、この円上には電子カルテ情報、指示情報および診察・所見情報等が液晶の点灯部分51として色や形状等を変えて表示される。最内側の円は、患者サークル44の時間軸円であり、この円上には患者基本情報、医事情報および問診情報が液晶の点灯部分51として色や形状等を変えて表示される。

【0024】また、いずれかのサークル41～44上には申し送り（夜勤一日勤）、ナースから医師に指示伺・患者の状態報告、ドクター指示（臨時処方、画像、検査等）、実施・予定表示（リハビリ、X線、MRI等）、臨時処方、医師のオーダ情報、薬局・病棟情報伝送、定時業務表示（バイタルサイン、与薬、処置、点滴等）、定時業務表示などが液晶の点灯部分51として表示される。

【0025】さらに、最内側の患者サークル44の内部領域は、患者の顔写真が表示される患者顔写真表示エリア45である。この患者顔写真表示エリア45には、患者番号、氏名、性別、年齢、電話番号、血液型、禁忌、入院形態、病室番号、病名、担当医師、担当看護婦、特記事項、入院年月日、保険種別、退院予定年月日、連絡メモ、趣味、アレルギーなどが表示されるようになっている。

【0026】表示エリア31は、サークル表示されており、イベント（アクション）の発生した（処置の必要な）時間的な情報とその処置（アクション）が完了したか未完了であるかを、処置の種別毎のサークル上で表示を行うことができる。ここで表示されたアクション毎の点表示では、その具体的な内容は判らない。そこで、この点表示の部分をクリックして選択（キーボードによるカーソル移動、又はペンによる選択）することで、具体的な内容がサークル表示に変わって画面上に文字や画像表示が行われる。例えば検査の必要な時刻の点滅表示は、その点滅部分を選択することで何の検査を行うかの文字表示が現れるのである。この表示部21は小型のパソコン画面であるから、常にサークル表示が出ている訳ではなく、文字入力時には入力文字の表示を行うことができる。サークル上には、表示出来るエリアが狭いため、必要に応じて詳細画面に切り替えて使用することができる。

【0027】つぎに、表示部21の入力エリア32を説

明する。入力エリア32には、つぎの機能の指示領域が設けられている。すなわち、患者指定、データ受信、データ送信、患者情報、クリティカルパス、看護計画、看護記録、バイタルサイン入力、医師指示、日時指定、書記、引継事項、写真、数字0～9の領域が設けられている。

【0028】患者指定の指示領域は、これをペン等で指定することによって、入力エリア32を図6の表示に変えるためのものである。同図に示すように、入力エリア32には患者番号を入力できるフィールドが表示される。そこで、看護業務者は患者番号を入力して指定することができる。なお、図7のように患者番号以外にも患者名を入力するようにしてもよい。

【0029】データ受信の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2に看護業務データを受信することができるものである。データ送信の指示領域は、これをペン等で指定すると、移動体通信携帯端末2から看護業務支援装置1へ看護業務完了データを送信することができるものである。

【0030】患者情報の指示領域は、これをペン等で指定すると、入力エリア32を図8の表示に変えるためのものである。同図に示すように、入力エリア32には患者番号を入力できるフィールドが表示される。そこで、看護業務者は患者の患者番号、患者氏名、測定年月日、体温、血圧、脈拍、呼吸、身長、体重を入力することができる。

【0031】クリティカルパスの指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2にクリティカルパス情報を受信することができるものである。看護計画の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から看護計画情報を受信することができるものである。バイタルサイン入力の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2にバイタルサイン情報を受信することができるものである。看護記録の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2に看護記録情報を受信することができるものである。医師指示の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2に医師指示情報を受信することができるものである。

【0032】前記日時指定の指示領域は、これをペンや指先で指定することによって、入力エリア32を図9の表示に変えるためのものである。同図に示すように、入力エリア32には看護業務データを入力できるフィールドが表示される。そこで、ユーザは（1）12時間、（2）24時間、（3）3日、（4）7日、（5）14日、（6）21日、ユーザ指定から選択できるのである。メモの指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2にメモ情報

を受信することができるものである。引継事項の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2に引継事項を受信することができるものである。写真の指示領域は、これをペン等で指定すると、看護業務支援装置1から移動体通信携帯端末2に写真データを受信することができるものである。

【0033】つぎに、本実施形態の看護業務支援装置1の作用・効果を説明する。図10は看護業務確認処理のフローチャートである。図4および図10に示すように、看護業務者Uが移動体通信携帯端末2の表示部21における入力エリア32の看護計画ボタンをクリックすると、看護業務情報の確認要求が移動体通信携帯端末2から看護業務支援装置1に送信される。看護業務支援装置1では検索手段11によって、当該看護業務者Uが遂行すべき看護業務情報がデータベースDB1～DB6から検索される。検索された看護業務情報は、送信手段12によって前記移動体通信携帯端末2に送信され、表示部21に入力部22として表示される。この看護業務情報のうち、看護情報、コメディカル情報、ドクター情報および患者情報は看護サークル41、コメディカルサークル42、ドクターサークル43および患者サークル44上における対応する時刻上で点灯部分51としてそれぞれ点灯する。したがって、看護業務者Uは移動体通信携帯端末2の表示部21上の点灯部分51を見ることによって、自分が遂行すべき看護業務情報を確認することができる。よって、看護業務者全員が同一情報を共有することができ、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができるという効果を奏する。

【0034】図11は看護業務実施完了登録処理のフローチャートである。同図に示すように、看護業務者Uが各看護業務を完了するたびに、移動体通信携帯端末2の入力エリア32の日時指定ボタンや患者指定ボタン等をクリックして、看護業務の実施完了情報を入力すると、この看護業務の実施完了情報は看護業務支援装置1に送信される。看護業務支援装置1では、データ格納手段14によって当該看護業務の実施完了情報がデータベースに格納される。

【0035】本実施形態の看護業務支援設備によれば、以下の(1)～(3)の効果を奏する。

(1) 看護業務者Uが行うべきスケジューリングされた看護業務データが、看護業務者毎に、看護業務データベースDB1～DB6に一元的に管理されている。このため、各看護業務者Uが移動体通信携帯端末2から当該看護業務者Uが遂行すべき看護業務データを問い合わせると、看護支援システム10では検索手段11によって看護支援データベースDB1～DB6から看護業務データが検索され、この看護業務データは送信手段12によって前記移動体通信携帯端末2に送信される。このため、看護業務者Uは、当日行うべき看護業務データを知ることができ

き、医療ミスを防止することができる。また、各看護業務者Uが看護業務実施完了毎に看護業務完了データを移動体通信携帯端末2から送信すると、看護業務支援システム10ではデータ格納手段14によって看護業務実施完了データが看護業務データベースDB1～DB6に格納される。よって、看護業務データベースDB1～DB6を利用することによって、全ての看護業務者Uが同一情報を共有することができ、この結果、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる。

(2) スケジューリングされた看護業務データが同心で複数の時間円、すなわち看護サークル41、コメディカルサークル42、ドクターサークル43および患者サークル44の上に点として点灯するので、看護業務者は自分が行うべき看護業務をいつ行うのかを一目で確認することができる。

(3) 看護業務情報が、患者基本情報、診察科情報、診療情報、担当患者情報、医師指示情報および看護情報としてそれぞれ別々のデータベースDB1～DB6で管理されている。このため、これらの看護業務情報を管理しやすく便利である。

### 【0036】

【発明の効果】請求項1の発明によれば、スケジューリングされた看護業務データが同心で複数の時間円上に点として点灯するので、看護業務者は自分が行うべき看護業務をいつ行うのかを一目で確認することができる。請求項2の発明によれば、看護業務者が行うべきスケジューリングされた看護業務データが、看護業務者毎に、看護業務データベースに一元的に管理されている。このため、各看護業務者が自分の遂行すべき看護業務データを問い合わせると、看護業務支援システムでは検索手段によって看護支援データベースから看護業務データが検索される。このため、看護業務者は、当日行うべき看護業務データを知ることができ、医療ミスを防止することができる。また、各看護業務者が看護業務実施完了毎に看護業務完了データを送信すると、看護業務支援システムではデータ格納手段によって看護業務実施完了データが看護業務データベースに格納される。よって、看護業務データベースを利用することによって、全ての看護業務者が同一情報を共有することができ、この結果、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる。

請求項3の発明によれば、看護業務情報が、患者基本情報、診察科情報、診療情報、担当患者情報、医師指示情報および看護情報としてそれぞれ別々のデータベースで管理されている。このため、これらの看護業務情報を管理しやすく便利である。請求項4の発明によれば、看護業務支援システムをコンピュータで読み取ることができる。請求項5の発明によれば、看護業務支援システムを動作させることができる。請求項6の発明によ

11

ば、看護業務者が行うべきスケジューリングされた看護業務データが、看護業務者毎に、看護業務データベースに一元的に管理されている。このため、各看護業務者が移動体通信携帯端末から当該看護業務者が遂行すべき看護業務データを問い合わせると、看護業務支援システムでは検索手段によって看護支援データベースから看護業務データが検索され、この看護業務データは送信手段によって前記移動体通信携帯端末に送信される。このため、看護業務者は、当日行うべき看護業務データを知ることができ、医療ミスを防止することができる。また、各看護業務者が看護業務実施完了毎に看護業務実施完了データを移動体通信携帯端末から送信すると、看護業務支援システムではデータ格納手段によって看護業務完了データが看護業務データベースに格納される。よって、看護業務データベースを利用することによって、全ての看護業務者が同一情報を共有することができ、この結果、患者誤認を防止でき、看護業務の経過を時系列に表示して、看護業務の実施忘れや遅延の発生を防止することができる。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本実施形態の看護業務支援設備Aのネットワーク構成図である。

【図2】本実施形態の看護業務支援装置1のシステム構成図である。

【図3】移動体通信携帯端末2の説明図である。

【図4】表示部21の拡大図である。

【図5】表示エリア31の説明図である。

(7)

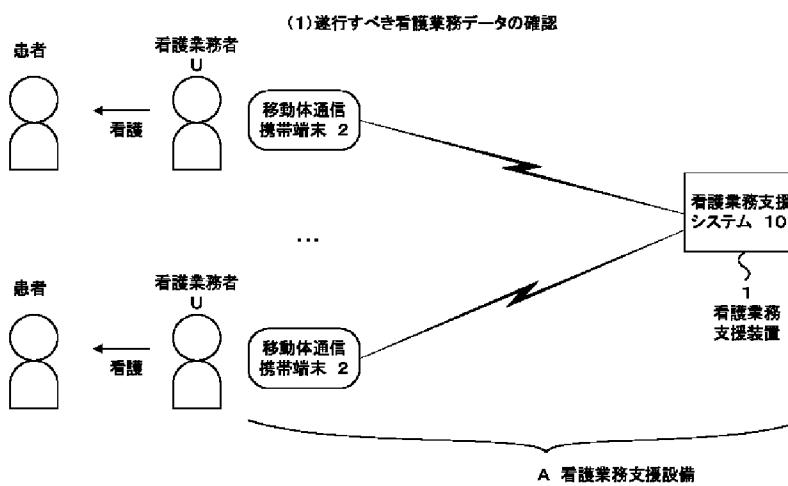
12

- \* 【図6】患者指定時の表示部21の説明図である。
- 【図7】患者指定時の他の表示部21の説明図である。
- 【図8】患者情報入力時の表示部21の説明図である。
- 【図9】時間・日選択時の表示部21の説明図である。
- 【図10】看護業務確認処理のフローチャートである。
- 【図11】看護業務完了登録処理のフローチャートである。

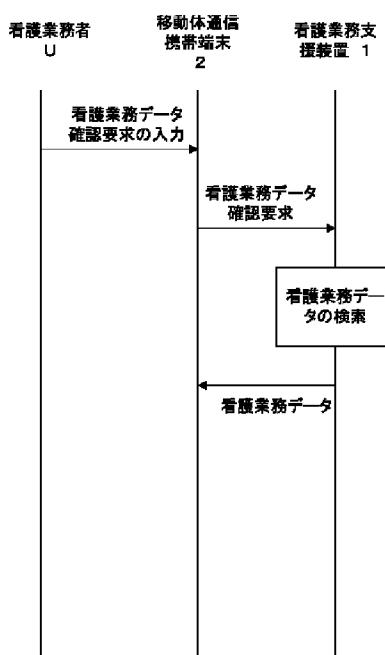
## 【符号の説明】

A	看護業務支援設備
10	1 看護業務支援装置
	2 移動体通信携帯端末
	10 看護業務支援システム
	11 検索手段
	12 送信手段
	13 受信手段
	14 データ格納手段
20	21 表示部
	22 入力部
	31 表示エリア
	32 入力エリア
	DB1 患者基本データベース
	DB2 診察科データベース
	DB3 診療データベース
	DB4 担当患者データベース
	DB5 医師指示データベース
	DB6 看護データベース
*	U 看護業務者

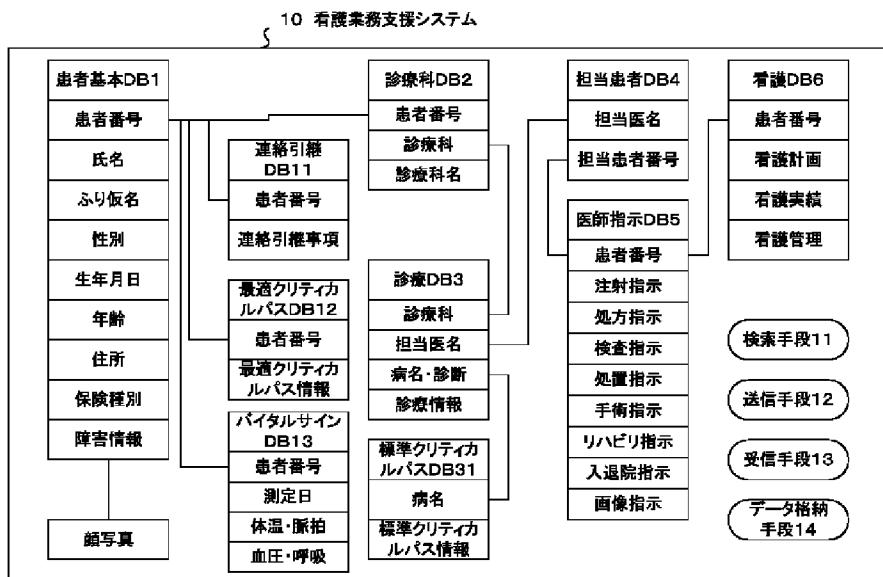
【図1】



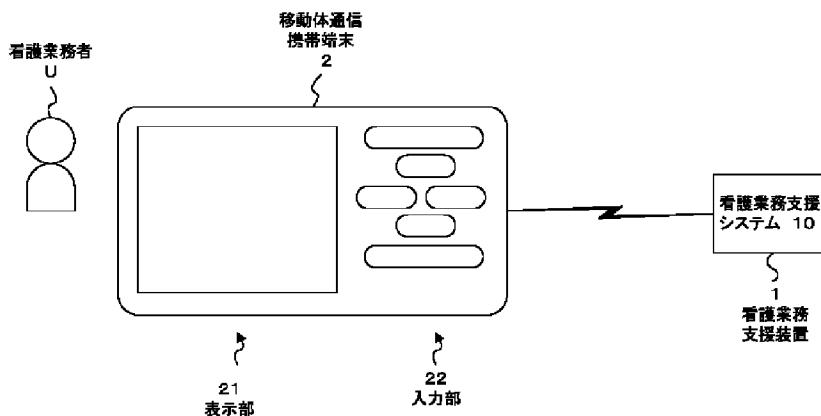
【図10】



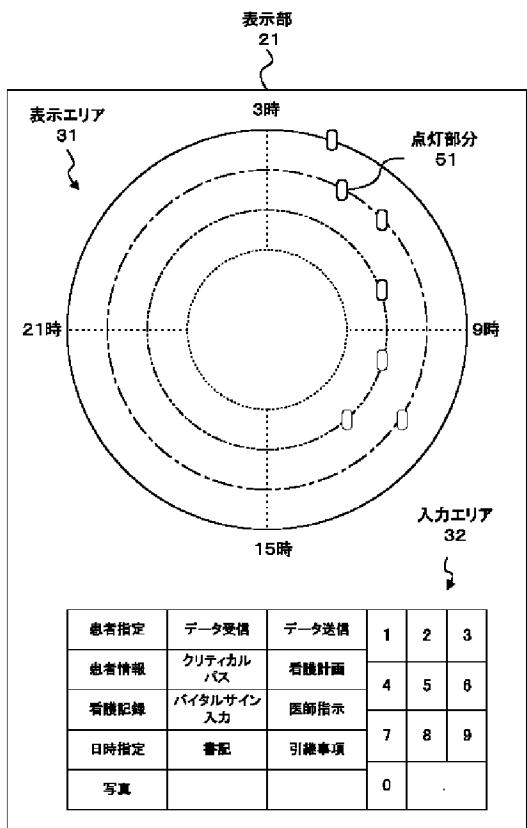
【図2】



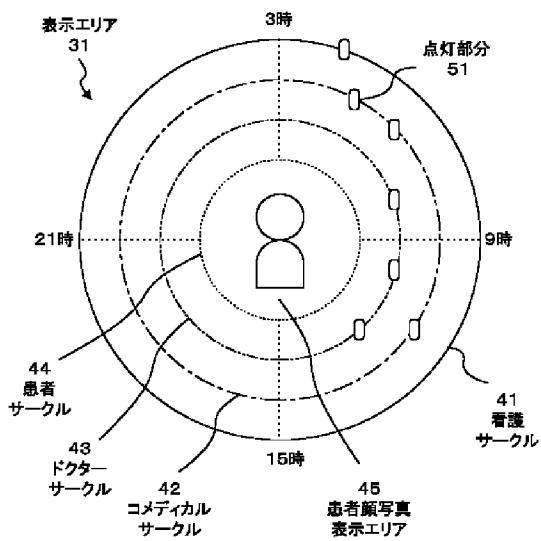
【図3】



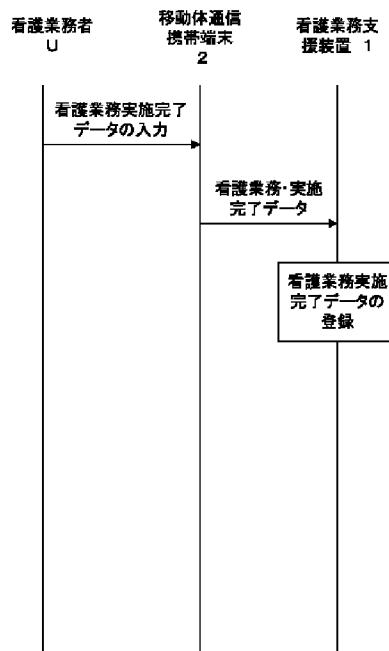
【図4】



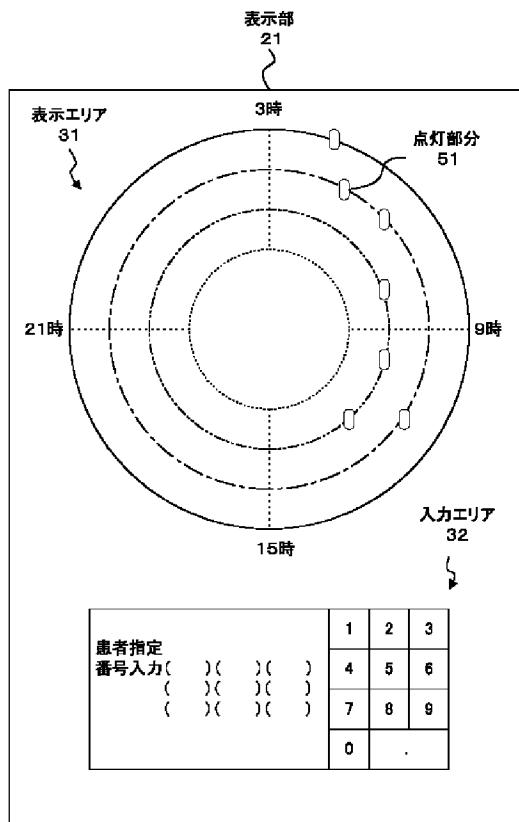
【図5】



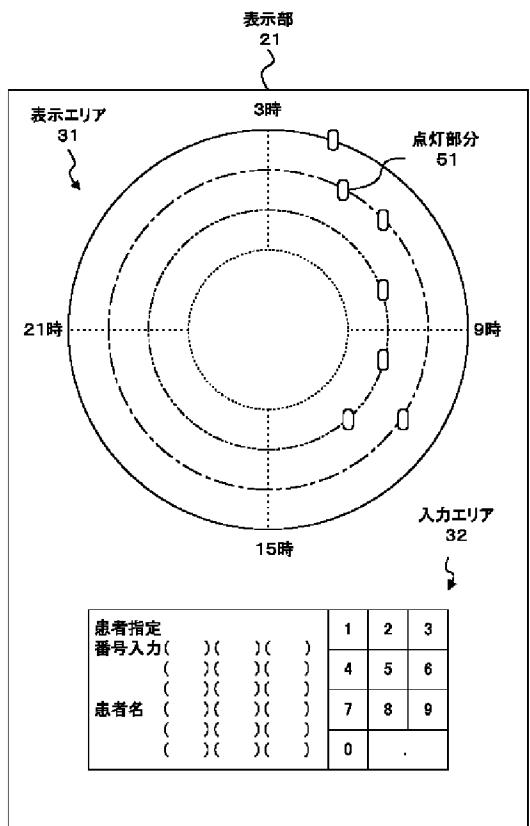
【図11】



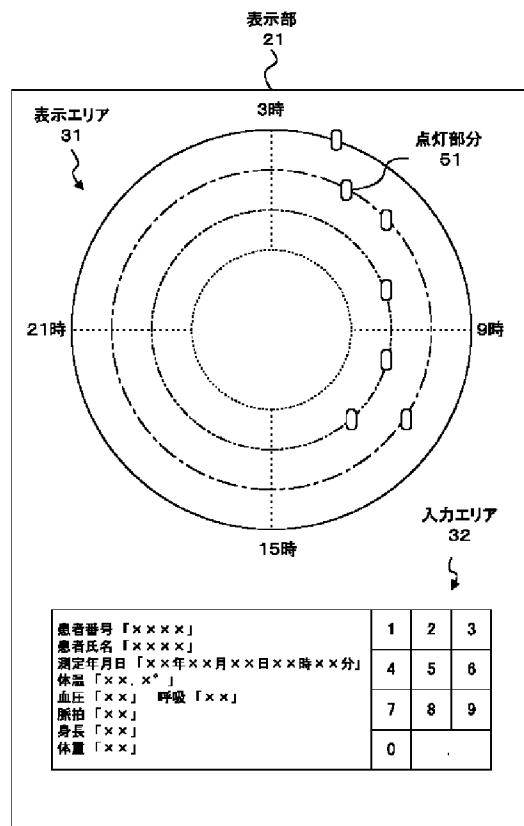
【図6】



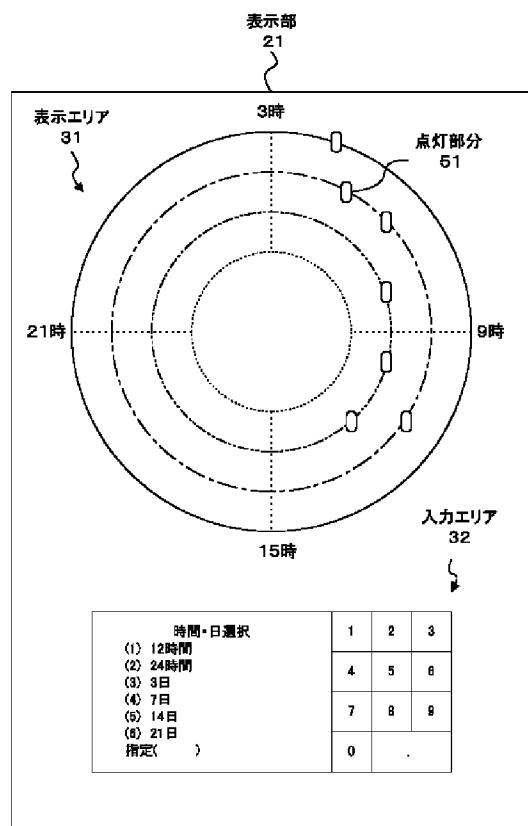
【図7】



【図8】



【図9】




---

フロントページの続き

(72)発明者 加治 順子  
香川県高松市木太町4区2094

(72)発明者 長谷川 昌雄  
神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1丁目57番地43  
Fターム(参考) 4C341 LL30